

駒ヶ根市文化財

名称	光前寺の来迎阿弥陀図
種別	美術工芸品(絵画)
指定	市・有形文化財(平成 28・1・20)
所在地	赤穂 29
所有者	光前寺
説明	<p>寺の伝承で来迎阿弥陀(らいごうあみだ)とされているこの佛は人の臨終に際し枕頭(ちんとう)にあらわれ、死者を西方の弥陀浄土に導くという浄土信仰から描かれたものである。</p> <p>普通の来迎図では阿弥陀如来が、観音、勢至の二菩薩を始め多くの供養仏を伴っておられ、観音は死者をのせて阿弥陀浄土に行く蓮台をもち、勢至は末敷蓮華合掌をされているのであるが、この図では、これらが描かれていないので、単独の阿弥陀図とも拝見できる。光前寺の阿弥陀図は座像ではなく立像である。</p> <p>立像の弥陀は座像より新しいといわれており、立像は平安末、鎌倉期に多いようである。この弥陀は臨終の場に急ぐため立ち上がった図かと思われる。</p> <p>本画は絹本着色のもので、縦 121.5cm、横 42.5cm、金泥をもって、精密に文様のすみからすみまで描いている。金色燦然(さんぜん)たる来迎弥陀の立像である。後光にはいわゆる阿弥陀光と言われている光芒(こうぼう)が描出され、その数定形では48本のところ、この図では19本である。</p> <p>黒地の上に銀彩が施されている雲があり、その上に緑青を置き、切実なる線条をもって描いている。一見切箔とも思える細線がある。画面にいたみが見受けられるが、幸いに原形を失っていない。眼は中だるみせず傾斜があつて、平安時代によく見られる引目の風は注目すべきところである。肉髻(にくけい)は赤く染め、やや低く、頭髪は紺青で低く描かれている優れた作品である。製作年代について、この図の箱書きによれば“金岡法眼”としてある。これが正しいとすれば平安後期ということになるが、箱書きは図を修復した江戸初期のものであることなどから鎌倉初期以後の作と考えられている。</p>

